令和８年度病害虫発生予報第８号

令和８年１１月２日
山梨県病害虫防除所

今月の天気予報

１０月２９日気象庁発表、１か月予報による関東甲信地方の向こう１か月（予報期間１０月３１日～１１月３０日）の天気は次のとおりです。

向こう１か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。低気圧や前線の影響を受けやすい時期があるため、向こう１か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

Ⅰ　特に注意が必要な病害虫

【果樹】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（〇）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ・スモモ・ネクタリン・オウトウ・ウメ	クビアカツヤカミキリ	―	―	〇７月７日に大月市駒橋地内の公園のサクラにおいて県内で初めて確認され、その後甲州市のモモ・スモモ園地、甲府市のモモ園地においても本種が確認された。 □本種の幼虫は、モモ、スモモ、ウメなどのバラ科樹木の幹や枝の内部を食害し、多発すると樹木を枯死させる恐れがある。繁殖力が高く、一度侵入すると防除が困難であり、果樹生産に大きな被害を及ぼす可能性があるため、早期発見・早期防除が極めて重要である。 □樹からフラス（木くずと糞が混じったもの）が出ていないか確認する。 □今年、成虫が脱出した痕跡（脱出孔）がないか確認する。 □来夏に成虫が脱出する予兆（脱出予定孔）がないか確認する。 □疑わしいフラス、脱出孔、脱出予定孔を発見した場合は、管轄の農務事務所または病害虫防除所に連絡する。 ※農業技術課ホームページ https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kubiakatsuyakamikiri.html □令和８年度病害虫発生予察特殊報第１号「クビアカツヤカミキリ」を参考に防除対策を行う。※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること。 https://www.pref.yamanashi.jp/documents/103/kubiakatuyakamikiri0715.pdf

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制トマト	黄化葉巻病	―	やや多い	○１０月下旬現在の発生量はやや多い。 ○１０月下旬現在、黄色粘着トラップほ場（中央市）におけるコナジラミ類の誘殺数は一部地域で平年よりやや多い。 □発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れてコナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、土中に埋めるなど適切に処理する。
	コナジラミ類	―	やや多い	○１０月下旬現在の発生量はやや多い。 ○１０月下旬現在、黄色粘着トラップほ場（中央市）におけるコナジラミ類の誘殺数は一部地域で平年よりやや多い。 ○向こう１か月の気温は高い見込みである。 □侵入を防ぐため、施設開口部（天窓、側窓、換気扇口等）はすべて０．４㎜目以下の防虫ネットを展張する。出入り口は二重カーテンにするなどして侵入を防止するとともに、ネットの隙間や破れ等がないか注意して確認し、不備があった場合は直ちに補修する。 □黄色粘着板を設置して発生状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。 □施設内外の雑草は増殖源となるため、除草を徹底する。また、芽かきした茎葉は適切に処理する。 □ウイルス病の発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて虫を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、適切に処分する。

Ⅱ　各作物の病害虫発生予報

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制トマト	疫　病	－	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。 □早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。
	灰色かび病	－	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □施設内が低温、多湿にならないよう、適度な換気を行い、過度な灌水は控える。 □早期発見に努め、発病した葉・花弁・果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。 □前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。
	葉かび病	－	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。 □多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。 □発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し、処分する。 □抵抗性品種でも発病する菌が存在するため、注意して発病の有無を確認する。 □すすかび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。 □県内で効果の低下がみられる薬剤もあるため、防除薬剤は総合農業技術センター令和４年度成果情報「トマト葉かび病の抵抗性品種に感染する系統の発生および有効薬剤」（https://www.pref.yamanashi.jp/documents/108010/r4_10_hakabi.pdf）を参考に防除する。 ※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること
	すすかび病	－	並 （例年比）	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。 □多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。 □発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し、処分する。 □葉かび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制キュウリ	べと病	―	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。 □多発すると防除が難しくなるため、発生初期の防除を徹底し、発病した葉は除去して施設外に持ち出し処分する。
	うどんこ病	―	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に出し、処分する。 □多発すると防除が難しくなるため、予防防除に努める。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
	褐斑病	―	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。
	アブラムシ類	―	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高い見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。
	ハダニ類	―	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高い見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
イチゴ	炭疽病	―	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □発病株は感染源になり、降雨や灌水により急速に蔓延するため、発病が確認された株は直ちに抜き取って適切に処分する。 □ベンレート水和剤(FRAC:1)、アミスター２０フロアブル(FRAC:11)に対し耐性菌が確認されているため、他の系統の薬剤を中心とした防除を行う。 ※参照　総合農業技術センター令和６年度成果情報「イチゴ育苗における底面給水の炭疽病被害軽減効果と薬剤耐性菌の発生状況」 https://www.pref.yamanashi.jp/documents/119387/r6_13_ichigotanso.pdf
	うどんこ病	―	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □早期発見に努め、発病した茎葉は除去して施設外に出し、処分する。 □多発すると防除が難しくなるため、予防防除に努める。

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
イチゴ	ハダニ類	－	やや多い	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量はやや多い。 ○向こう１か月の気温は高い見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。

【野菜全般】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
灰色かび病	－	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □施設内が低温、多湿にならないよう、適度な換気を行い、過度な灌水は控える。 □早期発見に努め、発病した葉・花弁・果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。 □前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。
オオタバコガ	－	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○１０月下旬現在、定点調査ほ場（甲府市、笛吹市、鳴沢村）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いため、発生初期の防除を徹底する。 □幼虫は果実内部に食入し、農薬がかかりにくくなるため、作業の際にほ場をよく観察し、食害痕や虫糞を目安に幼虫の早期発見に努める。
ハスモンヨトウ	－	平年並	○１０月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○１０月下旬現在、夏秋ナス（甲府市、笛吹市）の定点調査ほ場におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いので、若齢幼虫のうちに早期防除を徹底する。 □卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら速やかに捕殺する。

オオタバコガ、ハスモンヨトウのトラップ調査結果
https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html

Ⅲ　各病害虫対策

【ブドウ】

黒とう病

(1)　黒とう病の病原菌は結果母枝や巻きひげで越冬し、翌年の伝染源となる。翌年の発生を少なくするため、発病部位は切除し、ほ場の外に持ち出して適切に処分する。

(2)　つり棚の支線、簡易雨よけの資材やハウスのパイプに絡みついた枝や巻きひげを、丁寧に除去する。冬の剪定時には巻きひげ等が木質化して取りにくくなるため、柔らかいうちに除去する。

(3)　シャインマスカットなど、本病に弱い欧州系の品種は特に重点的に観察し、罹病部の除去を徹底する。

【果樹全般】

チュウゴクアミガサハゴロモ

枝に産卵痕を見つけたら、発生密度低減のため切除し、地中深く埋めるか焼却するなど適切に処分する。　※参照　令和６年度病害虫発生予察特殊報第２号（チュウゴクアミガサハゴロモ）
https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/70568874362.html

【夏秋作物収穫後対策】

ナス青枯病・半身萎凋病、トマト半身萎凋病・青枯病、キュウリつる割病、キャベツ黒腐病・ピシウム腐敗病・軟腐病・根こぶ病、ネコブセンチュウ等

(1)ナス、トマト、キュウリ、キャベツ等夏秋作物収穫後の根、茎、葉等は翌年の伝染源になるので早めに抜き取り、ほ場から持ち出し適切に処分する。
(2)前年発生の認められたほ場では作付けをしない。
(3)輪作を行う。

【サツマイモ基腐病について】

発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の蔓延を防ぐため、栽培期間中は、ほ場観察を通じて本病の早期発見に努め、発病株はほ場外に持ち出して適切に処分する。
本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構の HP に掲載されている、以下のマニュアルを参照とする。※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること
「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和４年度版）」
https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04.pdf

【麦】

裸黒穂病、なまぐさ黒穂病、斑葉病

健全種子を使用するとともに、種子消毒を徹底する。
(1)温湯浸漬または冷水温湯浸漬する（県病害虫防除基準参照）。
(2)薬剤による消毒は以下のいずれかの方法で行う。薬剤によって適用病害が異なるので、使用する前に登録内容を確認する。
・ホーマイ水和剤、トリフミン水和剤のいずれかを種子重量の０．５％粉衣する。または、ベンレートＴ水和剤２０を乾燥種子重量の０．５％粉衣する。
・ホーマイ水和剤の２００倍液またはベンレートＴ水和剤２０の２００倍液に６～２４時間浸漬する。

赤かび病

(1) 発生ほ場からの採種は行わない。
(2) 発病の少ない品種を選ぶ。
(3) 窒素質肥料の多量追肥を避ける。

立枯病

(1)イネ科以外の作物と輪作し、連作を避ける。
(2)土壌ｐH が高いと多発するため、硫安など生理的酸性肥料を用い、石灰質資材の施用を控える。

ハリガネムシ（コメツキムシ幼虫）

(1)ハリガネムシの好まない作物（ソバ、ナタネ、豆類など）との輪作か、被害の少ないオオムギの栽培を行う。
(2)春先に生育の遅れているムギは被害を受けやすいので、発生が予想される地帯では秋の遅播きや春播きを避ける。

Ⅳ　その他

【総合防除について】

・総合防除とは、予防、判断、防除のプロセスにおいて、耕種的・物理的・生物的・化学的防除などの多様な手法を組み合わせることで、環境負荷を軽減し、化学農薬を適正に使用しつつ、病害虫や雑草の発生を経済的な被害が生じるレベル以下に抑制する手法です。

・農林水産省では、農業者による適切な総合防除の実践を促進するためのマニュアルを作成しています。下記の URL をご参照のうえ、総合防除の推進にご活用をお願いします。

（参考）

農林水産省ホームページ 「総合防除（IPM）の推進について」

https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/g_ipm/

農林水産省 総合防除実践マニュアル（令和８年３月）

https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/g_ipm/attach/pdf/index-44.pdf

【農薬の保管管理と適正使用について】

1　農薬の適正使用や、計画的な購入のため、農薬保管庫の整理を行いましょう。
2　有効期限切れなど使わなくなった農薬は放置せず、処理業者に依頼して適正に処分しましょう。
3　農薬を購入・使用する際には、農薬登録番号や使用基準などの登録内容を必ず確認しましょう。
4　農薬による事故を防ぐため、保管庫にはカギをかけておきましょう。
5　農薬の使用にあたっては、使用方法をよく確認して正しく使いましょう
　※参照　https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kenkyu/nouyaku_shiyou.html

連　　絡　　先

山梨県病害虫防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）
ＴＥＬ　０５５１－２８－２９４１
Ｅメール　byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病害虫防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病害虫写真」等を掲載しています。

アドレス　https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/